

## 戦争の犠牲となった青春時代

清水口在住 高見澤摂子 九〇歳

小学校に入学した翌年にシナ事変、卒業の年には真珠湾攻撃、女学校卒業の年に終戦と、私の学生時代はずっと戦争でした。女学校の最終学年は全て、学徒動員で柏の日立工場で作業をしていました。東京大空襲があった日、私はたまたま寮に泊まらせてもらっていましたが、空襲ということで寮から防空壕に避難、空襲は川向こうということがわかると、防空壕から出て、下町が焼けていく様子、飛行機が落ちていく様子などをこの目で全て見ました。探照灯（サーチライト）の光がひらひらと落ちていくのを敵機だと思いながら、1機落ちた、2機落ちた、3機落ちたと数えていましたが、後で全て日本軍の飛行機だと知りました。東京は焼け野原となり、葛飾橋は東京から逃げてきた人たちが、それはすごい有様で渡っていました。

日立工場には銚子商業の学生も学徒動員で作業に来ていました。この学生たちは毎日のように車座になって、志願兵の送り出しをしていました。きっと学校から志願するように

勧められていたのでしょう。学生なのだから本来は学ぶことが本望だっただろうけれど、それは戦争によって奪われたのです。

友人の一人は、東京大空襲で爆弾を自宅に落とされ、両親が被害にあいました。町中の医者を回ったけれど、医者は見つからず、助けられず、亡くなってしまいました。彼女は長女であったから、妹や幼い兄弟を育てるため、自分を犠牲にして、すぐに結婚をしました。彼女は、その時で自分の人生は終わってしまったとよく話していました。

ある友人は、病院の付添い婦となりました。戦争で腰から下を切断して寝たきりとなった、軍隊の大尉か中尉といった位の高い人に尽くしていました。傷痍軍人年金で生計を立てていけるようにと、その軍人と結婚したと話していました。そんな話は当たり前のようによくさんありました。

私は女学校を卒業し、代用教員になりました。進学するか代用教員になるか、挺身隊（第二次世界大戦中に創設した勤労奉仕団体のひとつで、主に未婚女性によって構成されていた）になるかしか道はなかったのですから。教員になったば

かりの頃、学校には身体検査の器具がないからと、軍隊の駐屯地で身体検査を行いました。検査の後片付けを新人女性教諭3人だけで行い、帰ろうと歩きながらおしゃべりをしていると、飛行場にいた兵隊が「P52の機銃掃射だ」と言って、慌てて防空壕に逃げて行きました。私たちには一切構わず、自分たちだけ防空壕に逃げてしまったので、私たちは、バラバラと打ってくるのを官舎の木の下に逃げ隠れ、何とか助かることができました。

戦後は本当にみんな飢えていました。生きていくために闇市に出て行ったり、上野に出てキャバレーで働いたといった友人もいます。戦争は学生や女性に多くの犠牲を払わせるものです。何があっても戦争なんてするものではありません。100歳まで生きるのはしんどいけど、100歳まで生きられるのだったら、私は日本がどこへどう行くのか、この目でちゃんと見て、見極めてから死にたいと思っています。

今は自分のやりたいことがやれる時代です。若者には世界へ、さらに宇宙へ出て行って、自分の能力を発揮させて欲しいと思います。